昔の牛物語

I 岡山和牛の起源あれこれ

丑年にあたり牛窓では牛がつくことで、 牛窓の地名・産物のキャンペーンが行われ ていると報道がされていましたが、岡山県 和牛にまつわる起源について、岡山県畜産 史などにより紹介します。

「牛転」→「牛窓」:和銅6年(713年)神功皇后のみ舟が備前の海上を過ぎる時、大きな牛がおり、舟を覆そうとした。そのおり、住吉の明神が老翁となって、その角を持って投げ倒した所が牛窓であり、牛に関わる地名の最古とも言われている。

家畜市場:慶雲2年(705年)、美作一宮(津山市)で牛馬の守護神である中山神社の鎮座により始まった。県内最古である。

久世市場:慶長4年(1599年)、この地の荒神様に厄除けのため牛馬を連れて来ているうちに、売買交換したのが始まりである。

高梁市場:寛永5年(1628年)、備中 松山城主が牛馬の増産奨励と城下の繁栄お よび藩の収入増加のため、藩営で行われた。

牛肉:岡山で牛肉を食べる先鞭は、明治元年の上道郡にあった。医学館のオランダの教師で保健の面から勧奨した。当時、津山では牛肉を入手するのには苦労しなかったと言われており、「養生食」・「精力増進食」として食べていた。最初の牛肉店は、岡山東中島の開化楼で明治9年であった。

牛乳:明治8年、牛乳屋が営業され、和牛1頭で1日5~6合で搾り、売っていた。 牛乳は薬餌で、1合が8銭で米一升に匹敵 しており「牛乳を飲ませても助からなんだ。」と言われたという。

畜産共進会:第1回の岡山県畜牛共進会は、明治32年に後楽園で開催された。広範囲な共進会は明治32年島根県で中国連

甲元 勳(全農・旧経済連OB)

合共進会が行われ、第2回は明治35年苫 田郡一宮村(中山神社周辺)で開催された。 郡単位は明治36年邑久郡大伯村(岡山市) で邑久郡畜牛共進会が皮切りで会期5日間、 出品が380頭、経費640円90銭と記 録されている。第1回枝肉共進会は、昭和 35年大阪市津守枝肉市場で開催された。 蛇足であるが、昭和35年、第16回県共 進会が和気市場(県主催)で行われた。県 知事賞状が横書きの最初の年であった。和 牛の登記登録証は縦書きであり、名号○○ ○三号のように漢数字になっており、県知 事賞状ではアラビア数字、○○○3号とな って、固有名詞を変えるのであれば、知事 の苗字も直せと、久米郡畜連関係者(私も 含め) が県に抗議したが、結局言い含めら れた思い出がある。

岡山県は2009年度から、5年間「2 1おかやま農林水産プラン」案を発表され、 食料自給率を現在の39%を45%へ、畜 産関係は和牛の飼育頭数13,500頭を 1,000頭増の14,500頭へ、飼料 作物の増産と家畜糞尿の生物資源の活用を うたわれており、このプランの実行を期待 している。

Ⅱ 古書による相牛など

先祖が江戸後期に、「伯楽」をしており、 当時の専門書「牛治療調法記」を宝暦6年 (1756年)発行、それを現代文にして いただいたので、その一部を紹介します。

序

古くから徳のすぐれた天子や賢い君主は、 万民の生活を豊かにする方策として田畑を 耕すことが、まず第一と考え、国は、農耕 作を一番大切な使命と考えている。豊かな 国を保つため、田畑を耕し、荒地を開拓し、 農耕を教え、また、牛の力を利用して人々 がきつい労働の助けとすることを重んじて、 人々をいたわり養うことは、満ち足りて飢 えを知らない。

仮にも、人々をいたわり養う心を忘れたときは、人々や牛の多くは傷つき病が流行り、医療を信頼せず、祈祷や御札などを信頼し、牛の病を祈祷などで治そうとするが、最後は、牛の頭や足の傷は致命傷となり、ついには、死に至り、大変に嘆き悲しむことになる。

むしろ、耕地田で、長く生きている牛を 飼育する方策を知る方がよい。私は、いろ いろな人が牛に関わることについて述べて あるものを簡略に大切なことを写しとり、 牛たちが病気となる原因や薬のこと、して はならないことなどまとめて、牛医の代わ りとなるようなものを出したい。

「耕夫・織婦の讚」

人々に農耕を教える神々は、鋤や鍬を作る木を切り曲げて、鋤や鍬(手に持って田を耕す農具)を作り、その鋤や鍬の使い方を万民に教える。

ただし、これらの収益は、黄帝が天下を 治めるために使う。しかも、これらは占い にも使われる。

大諸侯の城も米などの穀物が無ければ、城を守ることは出来ない。また、人民は、絹50は無ければ、貧困を免れない。それゆえ、穀物の神社を作り、妃の部屋に蚕を飼う部屋を設けるようにした。

田を耕し、蚕を飼うことは、当世の責務であって、その制度をなくすべきではない。 中国古代伝説上の舜帝の耕したという山を耕すのは、舜帝の徳をたたえるものである。

険しい山地にかえるのは、周囲のお妃の 立派な行いがある由縁である。

大諸侯である舜や周王などに対して畏敬 の念を捨てずに、北の更地の蚕の部屋を残 すことをとめないものは、全員が衣食の原 点にかえり、その礼節の風を学ぶべきであ る。 季節の到来があり、米や麦の穀物がみのり、人々がいろいろ学んで、はじめて安心して暮らせる。

天子様は政治上の事柄を普段は、宮廷内 にいて、司をかたむけ穏やかに政を行う。

天子は、米麦をはじめ穀物の種をまき、 育て、田を耕し、尭舜国王と同じように属 の王は、生涯をおえる。

天子が、祖先の祭りに用いる米を作るために、自ら耕す田には、一般の農民があふれ、農耕や繭作りが行われている。これを見て、部下に命じて、織女と蚕女の姿を木で彫り宮中に安置する。天子様が農耕を奨励する推進後となった。

一般に言われるのに天子が良い行いをお こなえば、万民は必ず、それに従い良民と なる。

まさに、天子の治める土地は穏やかな風 のもと数々の植物が穂を出して平和をおお かしているようにみえるという。

農耕によい牛をみる方法

頭は、小さいが脳は大きくて、頭全体は 長く、体は丸っこくて、角は力強くそろっ ているのがよい。

また、瞳は丸く、上背があり、尻はすわっており、足は均整が取れている牛は、耕 す馬力がある牛である。

頭が小さく痩せている牛について、肉付きは良い方がよく、顔の悪い牛は長いツラをしている方がよい。短いツラは、寿命も短く、あわせて、ツラが大きく歯が飛び出し、背の低い牛にいたっては、半年ぐらいで死んでしまう。

白い線があって、その線が子供のような 顔を真っ直ぐに伸びている牛は、よい牛で ある。

目の赤い牛は人をつく。

目の下の巻き毛が涙で濡れていたり、鼻が濡れているのは大きなよい牛である。鼻の上に逆毛があるのは、よくない。

説明書で言ってあるのは、鳴く声が、「ひい、ひい」と鳴く牛は、馬力がない。

歯は、真っ白がよい牛である。

角は短いが、額が大きくて、渦巻きがその真ん中にあり、角が弓のように曲がっている牛はよい。また、角が前に向け曲がっているのもよい牛である。角が、後方に向いて曲がっているのはよくない。角の間に乱れ毛が立ち上がっている牛を「頭陀坊主」という。

説明書によると角が丸く、模様が細い牛は、 歩くのが、ゆったりとした牛である。

耳と角の間が指一本ぐらいの牛は、千里 の道を歩いても、転んだりしない丈夫な牛 である。

首の長い牛はよい。肩がくぼんでいる牛は、「単肩」と言って馬力がない。

短い毛が密生していて、しかも黒毛であれば、厳寒に良く耐える。長く、まばら毛で、ネズミの毛のような牛は、寒さに弱い。

赤く堅い毛の牛は傷つきやすい。毛が前に向かって生えている牛は良い。後向きは良くない。

わきの下横向きに毛が伸びているのは、弱 く倒れやすい。

前足がまっすぐで、肉付きがよく、また、

後ろ足が、程よく曲がっているのは良い牛 である。腿が痩せている牛は、良くない。

前足が弓のようにしなる牛の蹄は、大きくて黒く、紫がかっている牛には、鉄蹄を付けやすい牛である。

蹄の色が黄色がちな牛は、歩く力が弱い。 張筋があって耳に繋がっている牛は、早 く死ぬ。腹筋は無くても年をとるまで牛に は害はない。

尿を出す時前に飛ぶのも、真下に出るのがよい牛である。糞はうずくまるように出るのが、よい牛である。

牛の体が丸く、角は太く鼻骨が盛り上がって毛があまりない牛は、力がある。また、 尾が少し長めの牛は、大変良い牛である。

黄牛、青牛、黒牛どの牛も額の上に黄色 を帯びた花びらの形の斑点がある牛は、大 変よい牛とされている。